

研究速報

$$\left\{ \begin{array}{l} u^{[E]} = u_1^{[E]} + u_2^{[E]} \\ \quad = u^{[N]} + \frac{x^2}{3} \frac{\partial^2}{\partial \eta^2} u^{[N]} + \frac{x^4}{5 \cdot 2!} \frac{\partial^4}{\partial \eta^4} u^{[N]} + \dots \end{array} \right. \quad (37)$$

$$u^{[N]} = u_1^{[N]} + u_2^{[N]}$$

となり、(32), (33)式によって表現された。

7. 考察

4, 5で与えた模型によって、初期分布パラメーター \varOmega が0ならば自動的に薄膜解に移行することを知った。これは拡散現象が本質的には正規分布に従うのであり、初期分布 $f(y)$ の違いによって別の形で表現されているにすぎないのであるから当然の結果である。したがってその様な実験条件を作り出すことが出来るならば、薄膜解は正規分布そのものであり、しかも(体拡散項は特に)簡便さの故に最も有効な解析手段であることは間違いない。

しかし、ここで不都合な場合が生ずる。つまり $c = u/u_{std}$ の比較測定も一方では重要であるにもかかわらず、薄膜解は M 以外の他の量 u_{pure} , R , u 等の標準量を中心とした解析には不適当である。その場合は他の方法(定濃度源解等)によらなければならぬ。今回の模型はその様な欠点を補う他の解決方法でもある。

つまり、適切な量 M によって $f(y)$ がなるべく小で、しかも勾配が適切である様に前処理によって \varOmega を定める。この様にすれば比較的大きい量 M であっても十分に満足し、しかも同一試料から2種類の解析が同時に可能となり得る。しかしその代り測定回数が大よそ倍になって非常に面倒ではある。

パラメーター \varOmega の重要な意義は、上述の場合とは逆の場合に關してである。つまり初期分布 $f(y)$ が未知(したがって \varOmega が未知)のままである。 t 時間拡散の後に、 $y > 0$ の全領域で体拡散濃度分布 $u_{1,ob}(y, t)$ を調べ、かかる後最も妥当な値

$$\varOmega_{ob}(t) = \sqrt{Dt + \varOmega^2}$$

を決定するのである。この場合 D が他の方法によって既知ならば、 \varOmega [したがって初期分布 $f(y)$]が逆想されることになる。

一般的には、 D または \varOmega が未知のままであっても(22), (23)式に対し(31), (32)式が対応しているごとく、解析を遂

する上で何ら支障がない。その違いは $\varOmega = 0$ の場合は \sqrt{Dt} が測定値として与えられるのに対して、 $\varOmega \neq 0$ の場合は函数関係として与えられる。

絶対初期を仮定するならば、 $t = -t_0$ から $t = 0$ までの間に粒界が存在せず、しかも $y > 0$ の全領域で体拡散係数 D_0 の純粹な体拡散過程によって、時刻 $t = 0$ で $\varOmega = \sqrt{D_0 t_0}$ の初期分布を形成したのである。しかる後粒界が現れ、体拡散係数が D の場で t 時間拡散し、その結果

$$\varOmega_{ob}(t) = \sqrt{Dt + D_0 t_0}$$

$$or = \sqrt{D(t + t_0)}$$

として観測したと見なされる。この場合 $D_0 t_0$ はあくまでも実測によって決定された値でないのであるから、2段階の拡散過程を適當なモデルで逆想し、最も不利な初期状態 $f(y)$ [$u(x, y, t)$ が最も大]を都合良く解釈するか、または不明のままである。それにもかかわらず新たな座標 $\xi - \eta$ 面上で正確に議論が展開される。

粒界拡散は、必然的に体拡散に付隨して起るのであるから、体拡散の問題を避けて通るわけにはいかない。その場合やっかいな問題に直面する。

体拡散項によって \sqrt{Dt} または $\sqrt{Dt + \varOmega^2}$ を決定する場合、(測定誤差は別として)モデルを単純化したための影響を受けることになる。そうすると真に粒界拡散だけを考察していないのではないか?という疑問が生ずる。この問題が解決されない限り粒界拡散をさらに詳しく解析しようとしても意味が無い。この場合もまた ω , x その他のパラメーターの導入が考えられる。つまり任意の t 時刻測定面上で、 $y > 0$ の全領域で体拡散濃度分布 $u_{1,ob}$ を満足する様に試験的にパラメーターを決定するのである。その時(12)式の簡単な関係は非常に有効となるはずである。

ここで採りあげた2例は、その序論にすぎない。

(1975年3月28日受理)

参考文献

- 1) 梅津・西川 ; 生産研究, 26 (1974) 318.
- 2) 梅津・西川 ; 生産研究, 26 (1974) 391.
- 3) J. C. Fisher ; J. Appl. Phys., 22 (1951) 74.
- 4) R. T. P. Whipple ; Phil. Mag., 45 (1954) 1225.
- 5) T. Suuoka ; Trans. Japan Inst. Metals, 2 (1961) 25.